

故川上秀光先生との思い出

東京大学名誉教授
新谷洋二



川上秀光先生は去る9月11日に逝去され、享年81才でした。先生は東京大学を停年退官後、芝浦工業大学に移られ、新天地で研究を続け、若き学徒を教育していこうと張り切っておられました。夏休みに奥様とイギリス旅行されていた1993年8月に、エジンバラで倒れられ、以来18年余りの間、長い闘病生活をされて来られました。この間、ご本人は元より、看護に当たられた奥様を始め、ご家族の皆様のご苦労ご努力はいかばかりであったかと思えますと頭が下がります。ここに謹んで哀悼の意を表します。

同級生として都市計画の道を志し、共に歩んできた私が、以下昔通りの呼び方で川上君の在りし日を偲び、素晴らしい業績の一端を讃えて、心ばかりの小文を捧げます。

川上君と初めて出会ったのは、1949年夏、横浜港の貯木場にあったヨット置場でした。にこやかな笑顔の気さくな男でした。新制大学設立が遅れ、7月に新制東大教養学部に入學し、1週間の講義の後、夏休みになったので、ヨット部に入りました。多数の新入部員がいましたが、当時東大ヨット部は1部で毎年優勝を争う程強く、上級生の主力は海軍兵学校中退者が多く、練習は海軍張りで厳しく、次第に10数人に減ってきました。舟の数も少なく、中々乗れなかったため、早く技術を高めようと、共に朝早くから港に行き、整備作業とともに練習しました。我々は数隻ある12フィート・デインギーに乗らされましたが、川上君は1隻しかない5メートル・スナイプに乗らされていたので、とても目立ちました。帆走訓練中、同乗している先輩の罵声が海上の方々から聞こえましたが、建築の先輩で温和な津端修一さんと同乗していた川上君は丁寧な鍛えられていました。この時の付き合いが川上君の建築・都市計画志望に大きな影響を与えたと思います。ヨット部での練習は厳しかったけれど、皆夢中になってやっていました。富浦合宿や葉山から横浜港への回航など楽しい思い出も多く、中でも我々部員にとって1951年に東大が関東インカレで優勝した時、最後のレースで1、2、3位でゴールインした光景と感激は忘れられません。

駒場から本郷に進学した時、川上君は建築、私は土木と別れました。当時の新制度では、学科の中で4年生はコースに分かれており、特に都市計画コースは建築学科・土木工学科で共通になっていました。しかし、都市計画関係の教官・学生・講義・演習・文献は土木よ

り建築の方が豊富でしたので、学部後半から大学院にかけて、私は両学科を渡り歩き、川上君が所属する建築の高山研究室にしばしば屯して、先生の教えを受けながら文献を読み、川上君を始め、研究室の小島重次・中島泰助手、宮沢美智雄、川手昭二、紺野昭などの諸氏たちと都市計画について理想を語り、議論をして学んでいました。

修士課程を修了後、川上君は博士課程へ進まれた後、高山先生の助手になり、逸早く1960年に「岡山市中心部の再開発計画」で三宅俊治氏とともに日本都市計画学会石川賞（旧制度）を計画設計部門で受賞されたのは立派な研究の賜物でした。

1962年に高山先生が中心になって努力された結果、日本で初めて東大に都市工学科が創設され、川上君は助教授になられました。これに至るまで、川上君は高山先生の下で先生を補佐して、欧米の都市計画教育システム、物的計画固有の領域、地域計画とフィジカルプランナー、各国の学部・大学院教育の実態などに関する膨大な資料を集め、比較分析の上、学科設立のために必要な基本資料を作成された功績は大きいものでした。そのお陰で、建設省にいた私は1965年に都市工学科に移り、10年振りでもまた一緒になりました。その際、上記の資料を見て、彼の細かい字で書かれた努力と苦勞の成果に感心しました。

川上君は学生の面倒見がよく、大学紛争の際も学生たちとよく話し合い、立て看板・ピラを読んで、彼らの意見・心情の理解に努め、なすべき教育システムのあり方について私たちと議論し、改革委員会幹事として、その改革を実行して来られました。

我々が入会した頃の日本都市計画学会は小規模な任意団体でしたが、法人化し、会員の増大とともに、分野も業種も拡大し、次第に大規模化してきたため、多くの問題を抱えていました。この中で、我々は役員として学術活動・学会組織の改革に努めてきました。例えば、国際学術交流ということで国際委員会を作りましたが、相手各国の事情が異なり、統合調整が難しい中で、川上君は特に日韓問題に主体的に活動して道を付けられました。また日中間題についても渡部会長を助けてまとめられました。このように国際学術交流の基礎を築いてこられました。

1985～88年の間、川上君は副会長から会長を務められ、その後半には私も副会長として協力しました。学会では1988年に東京市

区改正条例制定百年を記念して近代都市計画百年の国際会議が企画され、川上君を中心にその実施に向けて、86年秋から準備に掛かけられました。彼はわが国の都市計画史の研究を、特に東京を中心に長年行ってこられたこともあって、この仕事に情熱を以て挑まれました。87年に日本都市計画学会・建設省・東京都・都市計画協会共催で実施が決まり、川上君はこの国際会議の主催責任者として、記念出版物「近代都市計画の百年とその未来」を出版し、3日にわたる会議の冒頭の趣旨説明を、最終日には立派な総括報告を行い、活発で有意義な行事とされました。特に、この出版物は、

川上君が中心になって、かなり広範囲の人からの協力を得て、日本を始め、主要な諸外国が20世紀に行ってきた都市計画の思想と実際に行った都市を網羅した立派な成果でした。2009年には、長年にわたる優れた業績により本学会功績賞を受賞されました。

川上君、長い間ご苦勞様でした。君が一生懸命教育されて来た多数の教え子たちを始め、指導されてきた各地の都市計画関係者たちが、今後君の教えを基礎に、都市計画の発展に貢献していく姿を見守っていて下さい。

高度成長期・激動期の都市計画を領導された川上秀光先生

筑波大学教授

大村謙二郎

本学会名誉会員であり、元日本都市計画学会会長の川上秀光先生が、2011年9月11日、逝去されました。享年81歳でした。

川上先生は1929年10月19日、京都市にお生まれになりました。医師である父上の仕事の関係で満州の小学校に転校されました。多感な少年時代である小・中学校時代を、大連、鞍山で過ごされました。川上先生の都市計画の原点に満州の風土、風景があるものと思われま

す。戦後、満州から本土に戻られて、先生は、京都一中、第三高等学校を経て東京大学に入学され、1954年3月に東京大学工学部建築学科を卒業後、大学院（高山研究室）に進学されました。1959年4月に東京大学工学部の助手に採用され、その後、助教授、教授に昇任され、1990年3月に東京大学を退職されるまで31年間の長きにわたり、東京大学での教育、研究に従事されました。東京大学退職後は芝浦工業大学に新設されたシステム理工学部教授として研究、教育に従事されました。

1993年8月、旅先のイギリス、エジンバラで倒れられ、その後の18年余にわたる闘病生活を過ごされてきましたが、永遠の眠りにつかれました。先生の闘病生活に伴走され、苦楽を分かち合いながらリハビリテーション、介護、看護に当たられたご家族の皆様、関係者の皆様に深い敬意と感謝を申し上げます。

川上先生はわが国の都市計画の第一人者として数え切れないほどの多くの業績を残されてきました。

わが国最初の都市計画の専門学科である都市工学科を東京大学工学部に設立されるにあたっては、恩師の高山英華先生をサポートされて設立趣意書の起草、カリキュラムの編成など多大な貢献をなされました。創設期から発展期にかけての都市工学科の教育に献身され、多くの有為な人材を育てられてきました。

日本都市計画学会では1981から1984年度まで、日本都市計画学会学術委員長、1985から1986年度は副会長、1987から1988年度にかけて会長を務められました。学術委員長時代には、現在の都市計画学会論文発表会における査読制度の確立、充実に尽力され学術論文の水

準向上に大きな寄与をされました。学会長を務めておられた1988年秋には、東京市区改正条例制定百年を記念して開催された、近代都市計画百年の国際会議の主催責任者として重責を担われ、国際会議を成功に導かれました。さらに、日本、韓国、台湾との国際都市計画会議や日本と中国との都市計画交流の基礎を学会長として築かれました。

先生は中央政府、地方自治体の各種審議会、委員会の会長、委員長、座長として、また、数多くの公民連携の都市開発プロジェクトのとりまとめ役として長年にわたって尽力されてきました。特に広い視野と包容力で有能、有為な人材を活用し、数多くのプランナーを育て、ネットワーク化し、プランナーの職能確立に向けて、熱心に取り組みされてきました。特に、都市計画実務に携わったプランナーが学位論文の形で業績をまとめることを薦められ、都市計画の学問と実務の連携に力を注がれてきました。

先生の強い関心は自分が携わってきた高度成長期の都市計画をどう総括するかという点にあり、各種の研究会を組織、運営されてきました。また、東大を退職される頃からは現代都市計画のあり方や、より広い都市環境システムとして都市計画を捉えることを強く意識されました。まさに、先生は高度成長期、激動期の都市計画を領導されてきました。

川上先生は全国各地の温泉巡りが趣味で、それぞれの土地のお酒、食べ物を楽しむグルメでもありました。また、旅先ではジョギング用具を携帯され、まちあるきならず、まち歩きを楽しんでいらっしゃいました。先生は、多くの方々との談笑を楽しみ、ユーモアあふれる考えを披瀝され、周りにいる人々を楽しませる名人でした。

本年三月の東日本大震災が象徴するように、わが国の国土、地域、都市のあり方が根本的に問われている現在、大局観、戦略観をもって都市計画をリードされてきた川上先生を失ったことは痛恨の極みであります。先生の遺志を引き継ぎ、日本の都市、地域の再生に取り組むことが残された者の責務です。

心よりご冥福をお祈りします。